

月の花挽歌 ～2. 酒とバラの日々～

2. 酒とバラの日々

2-1

真紀の好い人だった堀内昌幸は元禄時代から造り酒屋として三百年余り続く『W酒造』の十六代目を継承していた。

W酒造は長野市のJR篠ノ井駅から二つ目にある姨捨駅で降りて直ぐの、善光寺平を見下ろす千曲市羽尾地区に、本社工場と直売所を一万平米余りの地所に構えている。

大型バスも数台駐車可能なパーキング・スペースの脇には、数寄屋造りの売店があり、予約をしておけば、ガイド付きで工場見学もできた。

堀内に銀座のクラブ『こはる』を教えたのは、衆議院議員の清川正三郎で、堀内が長野県酒造組合の新会長に就任した年に、日本酒造組合中央会の会合に出席の為、上京した折であった。

清川の家も、信州の佐久市で元禄時代から造り酒屋をやっている関係もあって、新橋の日本酒造会館で行われた会議の後、堀内が議員会館に正三郎を表敬訪問した際、ひょんなことから、『こはる』へ連れて行かれることになった。

ママの真紀と意気投合したこともあって、それ以来、堀内は仕事に事寄せて上京しては、『こはる』のドアを開けた。

その頃の真紀は、高名な日本画家と、すったもんだの末に別れたことが、マスコミで取りざたされたりして、事態の收拾に苦悩していた。

堀内の五つ年下の妻の貞子は、子宝に恵まれない事も手伝ってか、国際ソロプチミストの会員となってからは、生来の世話好きが高じて、暇つぶしに自ら立ち上げた会社のホームページのネット販売やブログを尻目に、赤いベンツを乗り回して勝手気ままに出かけることが多くなった。使用人達に示しが付かない危惧もあったが、幸いに農業大学で醸造微生物学を修得し、長年務めていた越後杜氏の下で研鑽を積んだ二人兄弟で妹の女杜氏の麻里子が、義姉の尻拭いをしてくれた。

兄弟で十歳離れた妹の麻里子は、大学生当時に、研究室の助手と好い仲になったが、兄が気づいた時は終わっていて、それ以来、浮いた噂はなかった。

麻里子の酒が酒類鑑評会などで、受賞を重ねるようになると、白衣の女杜氏が立ち働く姿が、瓜実顔の美形と相まって、多くのメディアで取り上げられるようになった。